

(sp)



nakano_dialogue editing booklet vol.1

北村道子という人に会えた



北村道子という人に会えた



聞き手・執筆
写真・デザイン
熊井晃史
前原翔一

グッと来た映画の数々。衣装を通して、その世界観を手がけているのが同一人物であることを知るのは後のことで、それが、北村道子さんだった。スタイリストを自称しない上に、文筆家や、ましてや教育者ではないともする。にも関わらず、こちらは北村さんの仕事、言葉に、随分とインスピレーションという学びを得ていました。だから、今回どうしてもお話を聞きしたかった。10代向けの学び舎であるGAKUの『dialogue editing』と名付けられたクラスは、10代の生徒が都市を舞台に対話を通して本を作るものです。自分自身も作る側に身を置きたかったし、都市に北村さんの言葉が必要だと感じていたからです。

2025年3月1日。お会いすることが叶う。その前と後では、違ってしまったている。何がどう違うのかは上手く言えないけども、とにかく違ってしまっている。そういう出会いというものがある。もつと言うと、北村さんは、全てをそのようなセッションの場として生きているような気がします。だから、全てを、そのような出会いにしよう。

どのような話になったのか。クリエーションというものが持つ神話的な何か。放し飼いという営みとその言葉が持つ思想的な何か。都市と文化の歴史や本来的な何か。そう簡単に要約し得ないし、当然、自分の力量からは溢れます。そもそも、その圧倒的な話を短く言い表すことをしてはいけない気にもなります。同時に、太古の人間もこんな感じだったんじゃないか、そのようにして、このようにして、人は古来から生きてきたんじゃないか。

ないか、北村さんと話をしていると、そう感じます。若者たちと共に、北村さんを囲んで話に耳を傾けていくと、真ん中に焚き火があるのではないかと錯覚もします。火を灯し、夜への移ろいの中で語られる、人や土地を巡っていくような言葉。大切なものを思い出させてくれるような言葉。ここではないどこかへ意識を向けるための言葉。そういう言葉がくべられていきます。そういう場を、人類はずっと持ってきたんじゃないかなと思わされます。

北村さんいわく、仕事である撮影現場の休憩や移動中などで、気の合う人たちとずっとお喋りされているそうです。きつと、若いスタッフたちは聞き耳を立てているんじゃないかなと思います。その時、そこは、そういう場になる。

何が起こるか分からない。何が話されるか分からない。予想がつかない。でも、何かが生まれて、話が始まる。「たまさか」な偶然というものは、ほとんど野性や野良ということでもあります。野性というものが失われつつあるこの時代に、そのような野良の学びも同じ境遇にある気がします。野良の学び。それを都市に解き放ちたいですし、既に解き放たれているそれを感じたい。そのような気持ちを色濃く宿した次第です。

4



家畜化される前を覚えていられるか

北 今日、この場所もそうだけど、今、クリエイティブの現場はほとんど女性。女性の時代ですよ。

熊 GAKUも、女性の方からの応募が多いです。

北 でも、私なんか、こういうことには参加しないタイプだから。

熊 なは・・・。

北 私自身もそうだったけども、学校に疑問を持つ子ともう動いてんですよ、世界に向かって。疑問を持たないと、すぐ組織に入っちゃうじゃないですか。

熊 それは、そんな気がします。

北 Tシャツ1個とデニムがあれば生きていけるじゃないですか。

熊 組織の外だと？

北 はい。意識する必要ないじゃないですか。言ってること分かります？

熊 もうちょっと聞きたいです。

北 基本的に、人間なんて本能が壊れてる生き物。動物は本能を持ってるわけじゃない？2本足で立った時に、もう本能

5

が壊れてるっていうのが岸田秀の考え方なんですよ。

『ものぐさ精神分析』ですネ。

北 そうそう。私はそれを子どもの時に読んで、全くそうだと思って、親から離れ、組織から離れるという生き方をしてる。
熊 本能が壊れているから、あらゆる組織から離れるということですか？

北 独りで、本を読むのよ、難しい本をあえて読もうって感じで。分かなければそれをどうやって自分が分析してくかっていうのをやる。それを1桁の時に身に付けたから、常に右手にでかい辞書があって、いつも分析していく。ただ情報を覚えるんじゃないくて、分析していくことが大事なんじゃないかっていう生き方をしてる。

熊 年齢が1桁の時から。

北 はい。7歳の時から。

熊 はあー。

北 私自身の親がそういう考え方だったから。

熊 へえー。

北 基本的に人間って、家族の中で決まっちゃうんだよね。

熊 家族の中で決まっちゃう。

6

北 決まっちゃう。

熊 え、だから家族からも離れたということですか？

北 学校からも離れたんですよ。だって、例えば子どもの時にユニークでも、中学校に入るとそこに全く違う世界があるわけじゃない？そうすると、会話がかわってくるわけじゃない？一人の人間として、どれに自分が向かうのかっていうことは大事でさ、仲間ができたとしても、この子と言ってること違うなと思ったら去ればいいんだけど、そうならないっていうのは、そこに順応するっていう人間独特のものがあるわけですよ。だから、「ごめんさい、意見が違うからごめんね」って言う勇気が必要なわけじゃない？

熊 勇気が要りますね。

北 ケージというものがあって、それに入れられることで、どれだけストレスを受けるかっていうのが本能なんですよ。

熊 うわ。ケージって檻ですか？

北 人間だったら、家も学校ってのもそう。

熊 ふううう。

北 だから、変なことだけでも、アイルランドとかブータンとか、いろんな国に行くと、動物は解放されているんです。家の中に入らないんですよ。でも、オオカミっていうものがあるから、喰われないようにするために番犬がいるんです。そうすると、その国で食べる肉というのは、日本のものとは全く違う。

7

熊 家畜化されていない味？

北 そうそう。家畜っていうのは要するにハウスの中に入ることなんです。言ってみれば、私たちも家の中にいるから・・・。

熊 家畜化されていると。

北 される。私はそういう考え方なんですよ。それを若い時に知ってしまったから、「なんで家から出ないの？」「なんで学校に行くの？」って言っちゃうタイプなんです。

本能は、はじまりの物語を生きる

北 ニュージーランドのオールブラックスと仕事をした時に・・・。

8

熊 ラグビーの代表チームの・・・。

北 そう。今では有名になったけど、ハカって踊りがあるでしょ。今から、三十数年前の話だけど、今でももの凄く覚えてる。それで、一人ひとりのサイズを全部取る必要があって、測っていくんだけど、みんな顔に入れ墨を入れているんですよ。それってどういうことなんだろう？って質問したら、彼らは貴族なんだって。

熊 貴族。

北 そういう調子でいろいろ質問していきながら、いろいろ分かっていくんだけど、マスカハニーってあるじゃないですか。

熊 蜂蜜の王様って呼ばれているやつ。

北 最初にニュージーランドを発見したシャーマンの奥さんが、紫のちいちゃいお花を見つけたの。その彼女が、蜂蜜を作ったことがないのに、その花を見た時に蜂蜜を作ろうと思ったわけ。そういうストーリーも教えてもらったんだけど、それって非常にビュアでしょ。ふっとニュージーランドっていう陸地に入った時に、それを発見するっていうのは何だろう、私、そういうことが本能ではないかと思うのよね。

熊 ぐは。

北 そういうことが洋服でも何でも同じなんですよ。でも、今って、そういうものが侵されているじゃない？『暗殺のオペラ』ってベルトリッチが作った映画があって、それにドミニク・サンダっていう人が出るんですね。そのドミニク・サンダを見て、サンローランっていう人が初めて女性にタキシードを着せるんです。裸にタキシードを着せてパンツなんです。それまではパンツって、女性は履いてないんですよ。そういう時に、自分の中で服の力を発見する。『暗殺のオペラ』を観て、サンローランが女性にパンツを履かせたっていう発想するというのが、スゴくないですか？それって、要するに誕生と同じじゃないかと思うのね。

熊 誕生。

北 そう。今だったら、女性がパンツを履くとか普通に思うでしょ。私はその時代に生きてきているから、そういう誕生に驚いてきたわけですよ。裸にタキシードか、私も明日着ようと一言って。でも、売ってないわけじゃない？で、早くサンローランの洋服が来ないかなとかって、その当時思ってるわけよ。

熊 誕生。つまり、始まりの話というのは、ホント神話的です。

北 そうそう。ただか洋服なんだけど、一つの作品を見てそういうことを発想するのがやっぱりクリエイティブじゃないですか。はい。ドキドキします。

9

11



10



宿し、宿されるというクリエイションが生まれる都市は計画できない

熊 北村さんどうしてもお会いしたいと思い、それが今、光栄なことに叶っているわけなんです。北村さんと対面したときに、自分のなかにどういう言葉が宿されるんだろうか？生まれるんだろうか？みたいな、ワクワクとドキドキがあったんですね。それで、事前にプロジェクトのご説明をした方が失礼がないかなと思ってお伝えしたら、会話はセッションだから、そういう説明は不要である、と突き返されたわけです。ここまでのお話で、セッションという言葉が意味するものに少しだけ追いついてきた気がします。つまり、もちろんスケールの大小はあるんですが、すべてをそういう始まりの物語として捉えられているんだなって。かけがえのない一回性のセッションという。それで、今回の私たちの活動に紐づけて言うと、都市を舞台に一冊の本を作るということをやっているわけですが、そもそも、都市というものが、そういった新しいアイデアが宿される舞台になっているのだろうか？という課題意識があるんです。

北 時代ですよ。東京って、不思議な資本主義の街ですよ。そもそも私、そういうところで生きてなかった。

12

熊 時代？

北 私の若いころってというのは、食べ物と洋服と街が一体化してた。

熊 食べ物と洋服と街。

北 渋谷も、昔は屋台がいっぱいあったんですよ、東横近辺とかね。資本主義が台頭してくると、美しくないって追い出すじゃないですか。

熊 資本主義が発展していくと屋台がなくなるっていうのは、近代化につきものですよね。他には、洗濯物を外に干せなくなるとか。

北 そうそう。私が六本木に住んでた時がそう。世田谷に引っ越してきたら洗濯物を外に干せるから、わあ自由だって感じ。

熊 不思議とそういう生活に近いものが排除されていく歴史がありますよね。猥雑と言うか雑居性みたいなものが漂白されていくというか。

北 あるよね。私は、タイとかインドも好きでずっと通っていたんだけど、徐々に行かなくなるのはそういうことだね。それだったら沖縄でいいじゃないかと思っちゃう。沖縄のおばちゃんたちってそういうセンスじゃないですか。だから、しゃがんで、たらいでいろんなものをこうやって作ってるっていうのが……。今でも、韓国はそうだし、それがアジアじゃないかと思うのね。

熊 しゃがんでたらい。

北 そう。

13

熊 地べたにしゃがんで、手で混ぜる。

北 そう。チャンプルですよ、全部。そういうことがちゃんとあるのに、なんで西洋っていうところに学ばなきゃいけないのか。

熊 そういうことがちゃんとある。

北 そう。

熊 にも関わらず、それを手放さないといけない。

北 私ね、リバリアンなんです。国家は要らないっていう。人間って自分の好きなことを生きたいんじゃないかって。その方が、人も殺さないしさ。人が人を殺したくなるのは、そうじゃないからでしょ。

14

熊 好きに生きていれば、人を殺さない。

北 そう。子どもの頃に生物の先生から、擬態とか保護色とかって習うじゃないですか。白い雪が降るところは、基本的に動物も白くなるって。

熊 はい。

北 みんな、そういうふうに教えられてきているわけですよ。でも、私、経験してきているんです。18歳くらいの時に、モンゴルからずっと歩いていた時に、極楽鳥が飛んでいるのを見たんです。

熊 そこにいるはずのない、極楽鳥。

北 そう。だから、自分が通った小学校に手紙を出したんですよ。でも、そういうことはあり得ないんだって言うのよ。たまさか、南にいた鳥が北に行きたいっていうこともあるわけじゃない？ そうしたらそこに3匹ぐらい居る可能性だってあるじゃない？

熊 リバタリアンな極楽鳥。好きに生きている極楽鳥。

北 そういうことって、本当はいっぱいあつてさ。オオカミだって、イギリスっていう国が狂犬病になるって全部銃殺したんです。ところが、とある動物の博士がベアの2頭だけを放すんですよ。その博士は、オオカミのための犬笛も作るんです。

熊 それも凄い話ですね。

北 『ナショナルジオグラフィック』の番組で、その博士が取材されていたんですね。で、その頃、彼はまだ20代だったのが、後に、アメリカに行くことになるんです。そのオオカミがいるってことで。イギリスで放したのになぜアメリカにいるんだ？ っていう話じゃないですか。

熊 理解が追いつかないですけども、一生懸命想像しています。

北 誰かが船に乗せたのかもしれないけどね。それで、彼はアメリカでタイヤを作るところから始めるんです。

熊 タイヤ？

北 幅の広いタイヤにすることで、軋んで音がならないようにするっていうんです。

熊 ああ。

北 取材のために同行するカメラマンも、1人だけにするっていうことを約束させるんです。そうやって自分で改良した車に乗って、ロッキー山脈の向こうまで、ずっと行くんです。そこで、犬笛をやるんですけど、全然来ないんです。番組ではテロップで何日後って出るだけなんですけど、ずっと何日も何日もやるんです。

熊 現場ではずっとやつてる。

北 そう。それで、オオカミの鳴き声が聞こえる時が来るんです。最初の1頭が、わつと来るんです。真っ白いオオカミ。

熊 わー。

北 つがいを連れてくるんですよ。で、更に次の時は、1列になって自分の子どもたちと並ぶんです。そういう時に、その博士は、わつと感情を出すこともなく、生きてて良かったって言うって帰るだけなんです。でも、本当の愛ってそういうことではないかなっていうのを、思うんです。分かります？ 言ってること。

熊 理解できているかどうかは分かりませんが、分きたい気持ちは募っています。

15

16

北 世界には、そういう放し飼いのストーリーっていっぱいあるんです。

熊 放し飼いのストーリー。本当の愛のストーリー。

北 そう。

熊 うーん、北村さんがおっしゃっていることは、全てその放し飼いの話かもしれないですね。

北 そう。

熊 自分を放し飼いにする話かもしれないと。

北 自分っていうか、熊井さんは都市が何とかがって言ってたんだけど、本来、そういう都市の魅力なんてものは計画することではないんですよ。私はすごくそう思うの。

計画はできない、だから掃除をする

熊 計画できる話ではないって時に、人は何ができるのかっていうのが気になります。

北 掃除をすることです。

熊 掃除。

北 これ、私の持論なんです。入り口と出口を綺麗にすること。水周りを綺麗にすること。そうすることで、その人が生きてくため

の何かが生まれてくんですよ。

熊 ぐわ。うーん、ちょっといいですか。

北 はい。

熊 先ほど少しキーワード的に出した、宿す、宿されるっていうことは、歓待という人間の営みを表す言葉にもなってるなって思っているんですね。入り口と出口と水回りを綺麗にしておくっていうことは、つまり、人を迎え入れる、あるいは新しいアイデアの到来を迎え入れるっていうことですね。

北 そういうことです。

熊 計画はできない。けど、掃除はする。うーん、凄いです。とはいえ、本来、人類ってそうやって生きてきたんじゃないか？という気持ちにもなります。

北 動物の世界を見てごらんよ。最終的には、ハイエナがみんなの食べ残しを食べるし、そういうことなんです。どこまでも動物って本能でやってんですよ。人間はプラスチックも作るわけじゃない？で、気が付いたら太平洋とか大西洋のクジラがみんなそれを食べて窒息してるわけじゃない？そう思うと、作ってもいいけども、それをどうやって処理をするかっていうのは人間の課題ではないかなって思うの。みっともないじゃない？

熊 そういう課題を残してしまう人間が？

北 うん。すごくそう思う。人間って頭脳が発展してきたから考えるし、思ったことをクリエイトするじゃない？でもその後のことをやらないんです。

17

熊 作りっ放し。

北 うん。みつともないのよ。例えばさ、私、たばこを喫んでただけど、その後は、絶対処理してた。

熊 吸い殻の扱い。

北 そう。今、街の排水溝、凄じやない？

熊 吸い殻がたくさん捨てられてますね。

北 排水溝に入れてどうするの？って注意すると、逆恨みされるからね。私知ってる限り、私の時代で好きでたばこを喫んでいた人たちは全くなかった、そういうこと。明治のお父さんたちも絶対しないんです。うまいから吸うってことだったんです。

熊 ちゃんと好きでやっている人は、ちゃんと掃除もする、と。

「ために」はあるけど、「ともに」がない

北 いろいろと自分たちでやってくしかないんじゃないですか。そこにしか学問はないんですよ。

熊 プラトンの洞窟の比喩の話もありますけど、リベラルアーツという呼び方がそうであるように、そういう洞窟というものから如何に出て自由になるのか？というところが学問だったりするわけですよ。

北 そういうもんですよ。だから私は今でも学問してんですけど、面白いです、分かっていると。私、去年の12月から抗がん剤治療入っ

たんですよ。そうしたらすごく面白くて。

熊 抗がん剤治療が面白い。

北 それで、こういう帽子を被っているんだけど、自分の中では帽子なんかなくなっちゃっていいかと思ってたんだけど、病院としては必要だったことなの。脱毛したところは穴になってるから、そこから菌が入ると大変だから、帽子が必要なんだって。

熊 そういうことなんですか。

北 そう。最初の時は脱毛だけならと思うじゃない？体毛からまつ毛から、毛が全部抜けるんです。だから、私、今まではラウンドの眼鏡だったんだけど、目にゴミが入るから、ちよつと大きめのレンズにして、鼻毛も抜けるから、鼻水も出てくるんですよ。だから、いかに毛は大事かっていうことが分かる。それで、病院の先生に、癌と体毛ってどう関係してるんですかって聞くんです。そうしたら、分からないって。それで思うんですけど、先生って、自分が癌ではないじゃないですか。だから、そういう質問すると、嘩然としたって言うんです。

熊 共に病んでいるわけではない。

北 だから、自分で調べようとはならないですよ。

熊 スミマセン、ちよつと立ち止まりなくなっただんですが、というのも、その話も、いろんな現場にあることだなと思ったんです。

北 そうなんですよ。

熊 例えば都市開発で言ったら、開発する側はそこに暮らしているわけじゃないって話でもあります。こっちは仕事、あつちは生活みたいな、ギャップさえあり、そこには結構重要なポイントがある気がします。

北 大きいですよ。

熊 教育現場だったら、先生は教える側であって学ぶ側じゃないってなると、同じ話になっていきます。

北 そういうことです。私が言いたいのはそれなんですよ。

熊 立ち止まって考えてみたら、それって何だかおかしいぞっていうことになってきますよね。患者のためにとか、子どものためにっていうのはあるけど、共に病むとか、共に学ぶということがないっていう。

否定から始まる肯定と解放

20

北 私は、否定から全部入ってるんだけど、でも、否定から肯定が始まるって感じで。

熊 否定から肯定が始まる。

北 学校で言ったら、先生が全てではないじゃない？ただ単純に生徒より年取っていて、知っていることが多いっていうことで、でもそれってデータなんですよ。

熊 データ。

北 だから私、子どもたちにやるべきことは、変な言い方だけど、ほったらかしにしておくことだと思っているのね。子どもって、異常なことやるじゃないですか。踊りもうまいしさ。で、飽きてくると止めてみたり、暇そうにしている子に、一緒に踊ろうとかって言うてみたりしているし。そういう大胆さって、ちょっと経つと、もうできないんですよ。本当は、子どもってみんな大胆なんですよ。小学校の時に、その大胆さを全部解放してあげると、すっごくいいんですよ。

21

熊 そう思います。

北 私が、ホント、それだったんですよ。たまさか水田先生っていう人が、ドイツでシュタイナー教育をやってて、ご両親が亡くなったことで、ドイツ人の奥さんと一緒に戻ってきた。そこで、たまたま落第の生徒を教えることになるんですけど、その1人が私で、もう1人オトマル君ってやつだったの。

熊 オトマル君。

北 うん。ダンスをやるんですよ。机をみんな片して、踊ろうって言う。で、全然分かんないんですよ。今思うと、ストラヴィンスキーの「春の祭典」を蓄音機でかけてるのよ。分かんない。でも、体がこうやって動くんだよね。それが重要だって言うの。

熊 本能。シャーマンの奥さんが、紫のちいちゃいお花を見つけて、蜂蜜を作りたくなくなってしまおうという次元での本能。

北 で、彼はその後死ぬんですよ。

熊 え。

北 トニー・ザイラーっていうオリンピックのチャンピオンがいたんですよ。それを、たまさか、見たんですよ。最後のクレジットにジュンイチ・オトマルって出てるんですよ。え、ひょっとして、オトマルジュンイチかなと思うじゃない？同姓同名はきつといっぱいいるんだけど、調べたら同一人物だったんです。残念なことにスキーのドキュメンタリーを撮ってる時に亡くなったっていうわけよ。たまさか、そのオトマルジュンイチがドキュメンタリーのフィルムメーカーになったんだってことが分かるじゃない？

熊 一緒に踊った、あのオトマル君がって。

北 そういうのって、全部つながっているんですよ。私も映画をやるようになって、あそこでけんかした時から動画っていうもの

にはまっちゃんだろうねとか、分かる。
分かる。つながっていく。

北 踊ったっていうことで、動くってことを知れば、ものって動くんだってことが分かるわけじゃない？

熊 自分も動くんだって。動く存在なんだって。

北 そうそう。それと同じこととして、ストロボを発明した博士もつながっていくんです。

熊 え？ストロボがつながる？

北 全部つながってくる。自分の生き方に対してですよ。

熊 たとえ刹那的なものだったとしても、自分の人生というものと無関係ではないし、それがむしろ持続的に影響を与え続けているということですか？

北 モノクロームって、強い白と黒を出す時にはストロボを使うんです。その一瞬の光が大切なんです。

熊 えっと、今日のこの話を、全部取りこぼさず受け止めたいっていう気持ちがあるんですが、すり抜けていくというか、溢れていくというか。

北 みんな思ってますよ。みんな同じことを思ってますよ。

熊 みんな同じことを思ってる？

北 そうそう。ただ言わないだけです。たまたま、今日、私がゲストだからね。それにしても、みんな必死に筆記してるね。

熊 僕は、お話することです精一杯ですけど、そりゃまあ、そうなると思います。

北 駄目なんです、本当は。体で受け止めないと駄目なんです。筆記すると、そのノートに想いが移動しちゃうんですよ。

熊 想いが体から逃げちゃう。それで言うところ、体の中に蓄積されたものは、単なるデータではないものにはなる気がします。

北 データにしちゃってどうすんのよ。

力を解き放つ方法としての具現化

熊 北村さんが、他のインタビュで若者に向けてやれることは映像を作ることぐらいだみたいなことをおっしゃっていて、印象的だったんですね。

北 写真も映像なんです。イメージーションは、するじゃない？ただ、それを具現化してないんです。映像は具現化されたものなんです。

熊 イメージーションで終わっているケースが多い？

北 そう。イメージーションだけで終わって、形にしないっていうことは、何の意味もないんです。だから私は、良いとか悪いとか別にして、形にしています。例えば、ファッションデザイナーは、イメージーションしたもので洋服を作ってるわけじゃない？だから、どうしてこういうものを作ったんだろうってことをやるわけだけ。

熊 分析のしがいがあると。

24

北 そう。

熊 イマジネーションが具現化されたものが、また誰かのイマジネーションにインスピレーションを与える。

北 具現化するっていうのは、もの凄いことなんです。私、文筆家じゃないから、こういうインタビューを受ける時は、もの凄い恥ずかしい言葉で喋っているんです。

熊 そうですかね。

北 言葉としては、そうなんです。だから、もの凄いチェックするんです。これは公に出る言葉ではないってことを指摘するんです。あなたはいいか分からないけども、私はそういうことを公には出したくないってことを言う。あなたが今持つてるバッグの身は何ですかっていうのと同じなんですよ。

熊 そういうファッション雑誌もありますけど。

北 やるべきことって、そういうことじゃないでしょ。

熊 その人のプライベートとか生きてきた経験に基づくものを公にするという行為が持っている、緊張感とか凄みとか、倫理観のようなものはある気がします。

北 人前で恥をかくってことは、本当は大事なんです。

熊 恥・・・。

北 私が初めて電通っていう会社にコマースシャルの仕事で行った時に、化粧品のカンペーンCMだったんですけど、ある人がな

んか話してたんですよ。で、私、手を挙げて「それ全然面白くない」って。

熊 意見を言う。言っちゃう。

北 「君は誰だ」ってなるわけじゃん。でも、1人のディレクターが「ちょっと面白いからあの子の意見を聞こうよ」って言うてくれて、で私が話すじゃない。「南フランスを想像してください。1人がそこを歩いてるよりも、100人が同じかっこして歩く。どっちに力がありますか」って。そうしたら、そのディレクターが「面白いこと言うね」って。こちらも「でしょ」って言うの。だから「私にやらせてください」って、それで、やったんですよ。言うからには、それを超えなきゃ、恥ずかしいでしょ。

熊 意見するのも恥をかく覚悟が必要だし、意見したからにはそれを、それこそ具現化しないと恥ずかしい。

北 そういうことが、私の言う暴力なんですよ。

熊 暴力？

北 殴るとかじゃなくて、力を暴く。

熊 わ、力を暴くって、力を解放するっていうことですか。

北 本来、そういう意味なんですよ。

熊 自分の力を解き放って、意見もするし、具現化する。

北 そういうことです。

25

26

熊 うーん。全部、放し飼いの話ですね。そういう潜在的な本来の力を解放するというか・・・。

北 それで、そういう力をその場にちゃんと返納するんです。

熊 うわ。

北 分かんない。分かんないけど、そういうことはやってみると意外といいよってさ、もう77年生きてて感じるわけ。まだ、みんな若いじゃないですか。そういうことを実際にしてないと思うんだよね。だから、生まれたからには、あなた次第よって言いたい。死ぬ時はエンジョイして死にたくない？

熊 それはそうよ。

北 そうでしょ。

熊 北村さん、そういう顔されてますもんね。

北 どこで死んでもOKなんです。そうじゃないと、つまらなくない？ってこと。

熊 うーん、当たり前なんですけど、こうやってお話をしてて自分の中で変化がたくさん生まれているんですね。いろいろあるんですが、都市がキーワードではあったので、その話をすると、都市って大きいし、固いし、いかつい、そういうイメージがあったんですね。計画ができないものだとしても、自分が、そういう都市の変化の原因の一端になれるかどうか？っていうことをえると、なれる感覚には到底なれない。ただ、北村さんの話聞いていると、一人の人間の、そこそ暴かれた力っていうのは、一つの都市よりも大きいかもしれないっていう印象すら持ってしまう。

北 そうです。

熊 そういうことですよね。

北 うん。

熊 そういうことだな、いえー！みたいな感じになりました。

都市と装いがシンクロしている

北 江戸って、一番良かったんじゃない？佃煮を買うには佃島まで行かなきゃいけない。今は丸善って言っても、みんな知らないけども、昔はいい本を買おうと思ったら日本橋の丸善まで行かなきゃいけない。みんながみんな、そういうことがあるわけよ。だけど、今はどこにでもあるじゃないですか。

熊 場所との紐付きがない。

北 装いつていうのも、そういうことだと思う。今、下駄は履けないですからね。

熊 コンクリートの道だとすぐぼろぼろになっちゃうつすよね。

北 そう。今の道で下駄を履いていると、ひっくり返るんです。それで、みんな着物を着なくなりました。私、自分で経験したから。

熊 実際にひっくり返った。

北 それで着物着なくなっただけです。そうすると、どういうことが起きるかって言ったら、歌舞伎とか、お能に行く時に、お年寄りが着物を着なくなりました。それじゃあ芸は廃れてくんです。芸っていうものは、そこにいる客が作っているんです。私は通って

27

28

熊 いた頃は、ほんとに素晴らしい着物を着て、お能とか歌舞伎を見てるご婦人と旦那方だったんです、客が。紋付き袴です、男たちは。そこで、わあっと、おひねりとかっていうことで歌舞伎は良くなるわけじゃない？今そんな人いないじゃない。下手すると、ファストファッションでいいわけじゃない？そうしたら歌舞伎の人たちは燃えないと思うよ。私、凄いと思う。

北 はい。僕は経験をしているわけじゃないので、口はばつたいですが、でもそう思います。

熊 そうでしょ。

熊 客席側がそういう文化領域つてものを共につくつていた存在なんだよっていうことをみんな忘れているとまず思いますし、そういう張り合いとか気構えみたいなものがないと、モチベーションも湧いてこないっていうのも、当然のことだと思います。湧いてこない。そういうことです。

熊 そういうことが結構失われつつあることだと思います。

北 そうだと思う、残念ながら。

熊 ファストファッションも、みんながそれなりにいい服を着ることができるとっていう意味でのファッションの民主化という捉え方もできるわけけども、敷居を下げることを頑張っていたら、その領域にあった奥行きみたいなものが無くなってしまったということになると、それって一体何なんだっけ？という虚しさが残ります。そういう現実認識の中で、さて、自分はどのような気持もあるんですけどね。

北 そうだね。そうすると、客側じゃなくて、一握りの金を持つてる人がそれを動かすっていうシステムが変わってくんですよ。

熊 うーん、なので、都市とか都市文化みたいなものつていうのを結構真剣に考えなきゃいけない気はしてるんです。道路から文化

29

北 までも同時に語る人って居ないと思うんですよ。コンクリートにすると、下駄で歩きづらい、だから和服を着なくなる。そうになると、お能や歌舞伎とかにおける緊張感も減る。したがって、文化そのものに張り合いが無くなる。そういう目線で、今の東京の都市を捉えて仕事をしている人が如何ほどいるんだろうか？とは思います。

北 ほんとそうだと思う。誰かがズルすると、その世界で頑張っている人が損するのよ。

熊 え？

北 建築だって、そうじゃない。伊東豊雄さんなんか凄い建築家なのに、被害を受けるわけじゃない。

熊 建築って、そんなもんかって見られてしまう？

北 そう。だからさ、しっかりしていったほうがいいと思うよ。それしか言えないですもん。



球体の上で巡る肉体の思想

北 私、結構中野好きなんです。

熊 そうですか。

北 はい。

熊 それ、もっと早めに聞けたらな．．．という気がしなくもないんですが．．．。

北 私、養老孟司が好きで、あの人は日本の哲学者だっと思ってはいるんですけど、ああいう老人が街の中にいるといいよね。

熊 最高の気がします。

北 中野に、劇場があつたじゃない？

熊 中野サンプラザですね。

北 あれが最初の私たちの劇場なんです。

熊 そうなんですか。

北 そうですよ。取り壊しになったでしょ。

30

熊 まだありますが、再開発予定ではありません。

北 あれしかなかったんですよ。今はどこでもあるけども、中野のあそこまで行かなきゃいけなかったんです。JAZZとか聞きに行きましたもん。その後も、撮影を中野ブロードウェイでやるが多かったから。

熊 中野が好きって言うのは、雑居性みたいところですか？

北 そうですね。それと、あそこは住宅地じゃないですか。

熊 はい。人がしっかり暮らしているんですよ。

北 そうそう。不思議な街だね。

熊 身も心も預けられる街であるということは、良い街であるかどうかの重要な指標でもあるような気がしています、最近。

北 だから肉体っていうことを考えたほうがいいと思うんだよね。

熊 肉体がちゃんと喜んでるかどうかっていうことですかね？

北 その喜びがないっていうのは、貧しいことだっと思うんだよね、私は。

熊 また、話がつながってきちゃいました。肉体っていうのは、しっかりと力を持っていて、でもそれが閉じ込められているから、それを解放した方が良く、その喜びを発露できる街が良いっていう。それに、そういうことを、その肉体の側も分かっているんだから、その分かっていることをちゃんと表そうっていう話になっていくっていう。

31



北 あなた方はまだ若いから、それを行動で示すべきだと思う。

熊 はい。それにしても、全部つながっちゃいますね。

北 つながるんです。興味さえ持てば、みんなつながるんです。というのは、地球自体が球体じゃない？

熊 球。

北 球体って言ったら、必ず戻ってくるんです。そういうことです。

熊 地球の上で、生きて考えるっていうことが、そうだねって。

北 私は、そう思う。